学校で対応するために

ゲーム・ネット依存症を知る

生きづらさの中にあるこころの成長

ゲーム・ネット問題
事例から考える

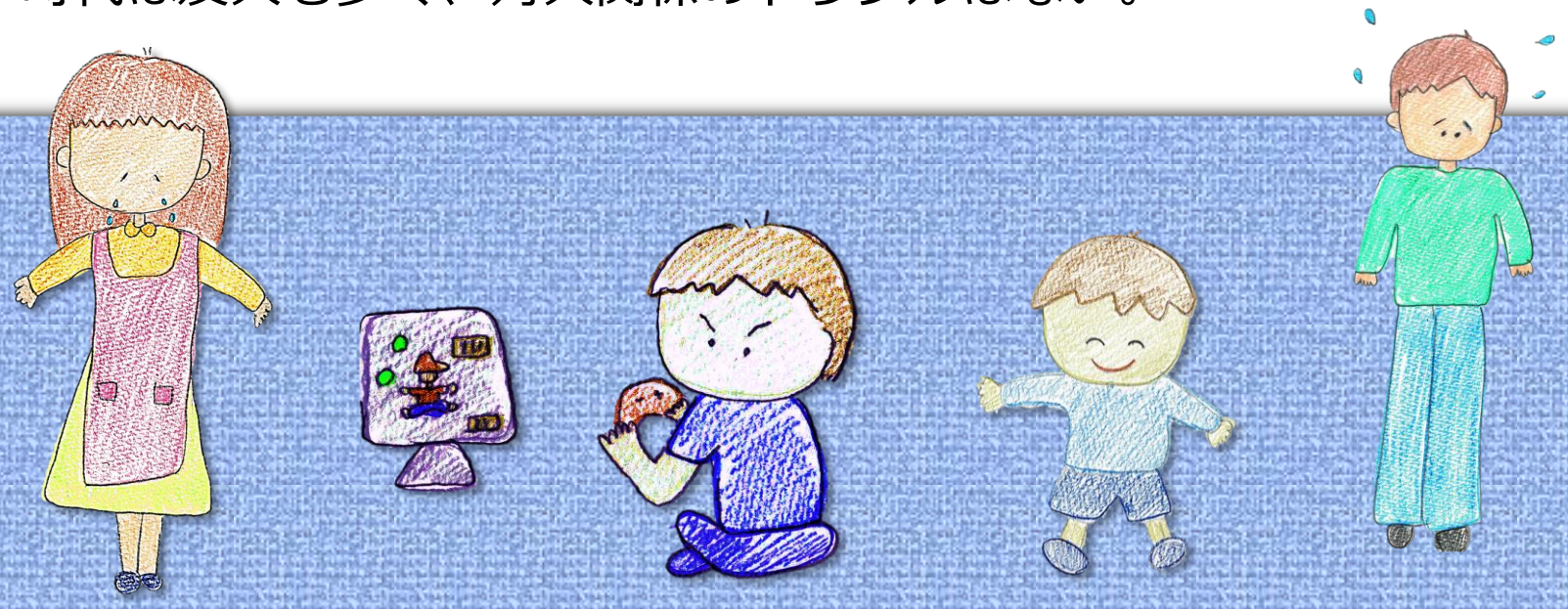
経過

　中学生から、高校生に上がると、急に勉強についていけなくなり、家に帰ってきては、オンラインのゲームにはまるようになる。生活のリズムが崩れ、部屋から出てこず、ゲームを取り上げたりWi-Fiを切ったりすると怒り出してどう対処していいか分からなくなってしまう。食事中も、ずっとスマホ見ているばかりで、何か話しかけたとしても、すぐイライラした様子で、食事も一緒にしなくなってしまった。そのような姿を見て、親としては不安がつのり、また声をかけても拒絶・反抗的な態度でどうしていいかわからない。学校も休みがちになり、とうとう不登校になってしまった。部屋からはチャットなのか、ゲームの中なのかわからないけれど、「死ね」「くそっ」「ふざけんな！」等暴言が目立つ。悪化しているように見えるこの状況を誰に相談していいかわからず、困惑していた。

背景

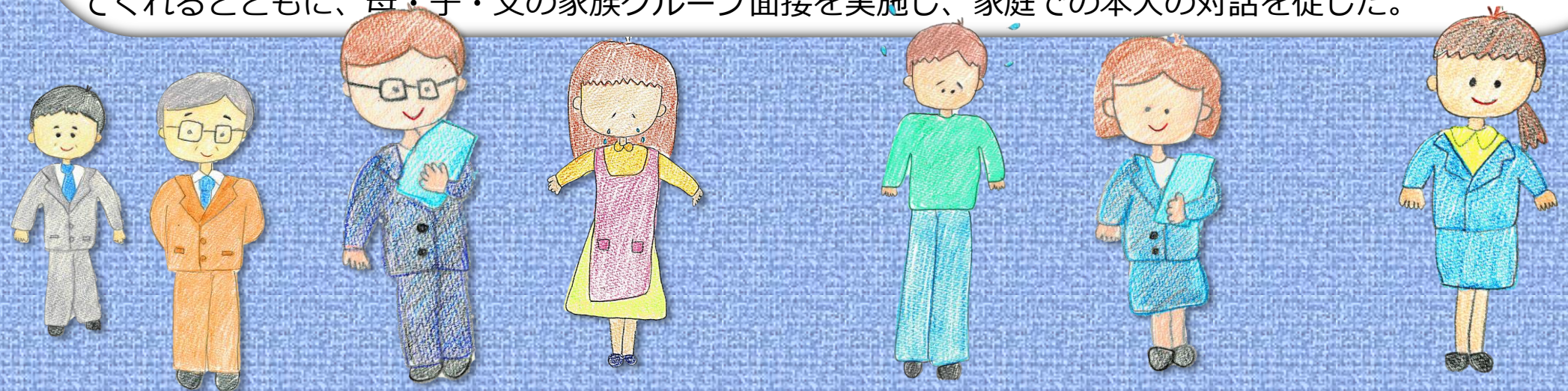
家族構成：父・母・本人（高校1年生）・弟（小学５年生）４人家族

　父会社員・母パートで短時間勤務、経済的な困窮はない。母は困って学校に相談し、教員の事は信頼している。父は子どもの教育に厳しく成績が下がると子供たちを叱る。父と母はあまりコミュニケーションがとれておらず、子どもの事であまり話し合えない。本人は中学生までは成績は優秀。中学はサッカー部で３年間こなしていた。中学時代は友人も多く、対人関係のトラブルはない。



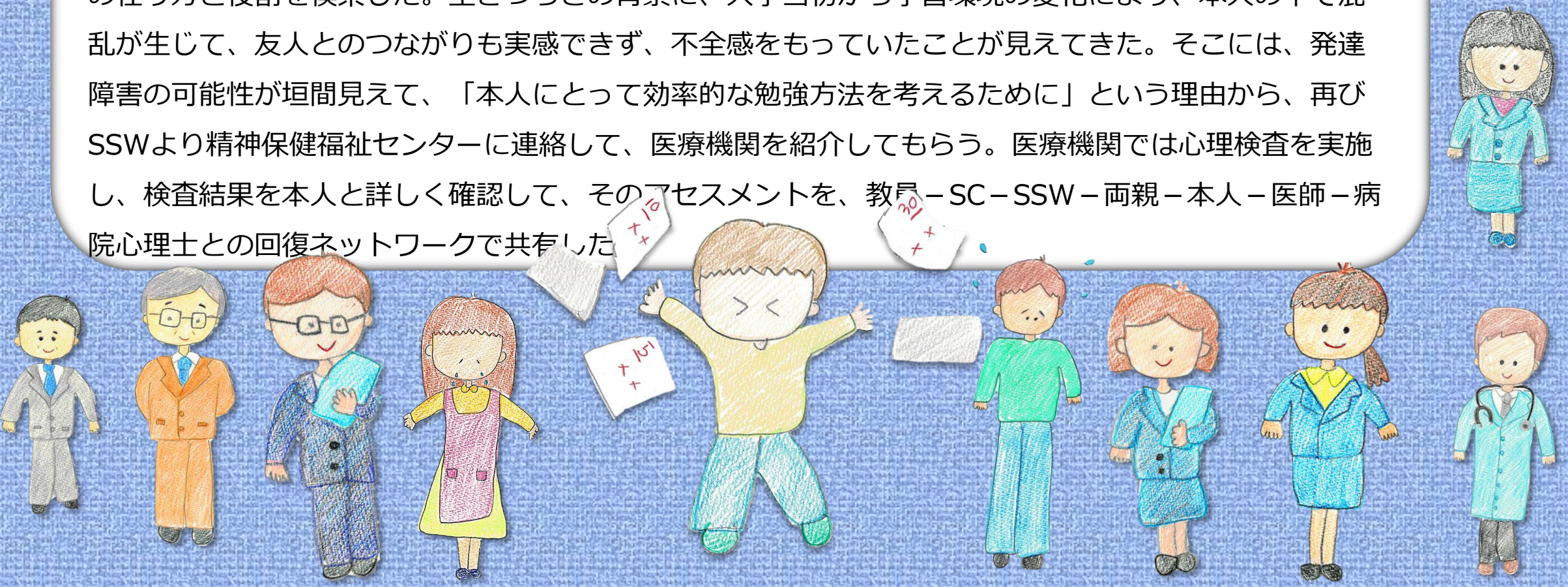
関わり

　母から欠席の連絡が続くようになり、担任がまずSCに相談した。SCより感情の悪循環がある可能性があるので、「先生が一人で抱えない方がよい」というアドバイスを受け、SCと三者で関わることにした。主としてSCが保護者の相談を受け持ち、母と「本人の生きづらさの理解」に焦点をあて面接を開始。保護者の守秘に関する許可を得て教員-SC-保護者情報共有しながら本人の理解を進めた。主に母親の語りからは「自分の育て方」について「罪悪感」が語られる、担任も心のそこで「母が甘やかしている」という思いがあった。それに対して、SCより「誰・何が「問題」ではなく」、担任・また、母からみた率直な本人像を語ってもらう。担任は「なんとかしなければ」と責任を引き受けていたことに気づき、教師としての自分の役割を再確認した。また、母の語りから見えてくる本人の「課題」を一緒に考えるようになった。ＳＣより、「理解のネットワークを広げる」ためにＳＳＷの導入の提案を受け、管理職にも報告・相談をした。そこから、母の同意を得てSSWも介入する。SSWは自宅訪問も実施して、家庭での様子を報告してくれるとともに、母・子・父の家族グループ面接を実施し、家庭での本人の対話を促した。



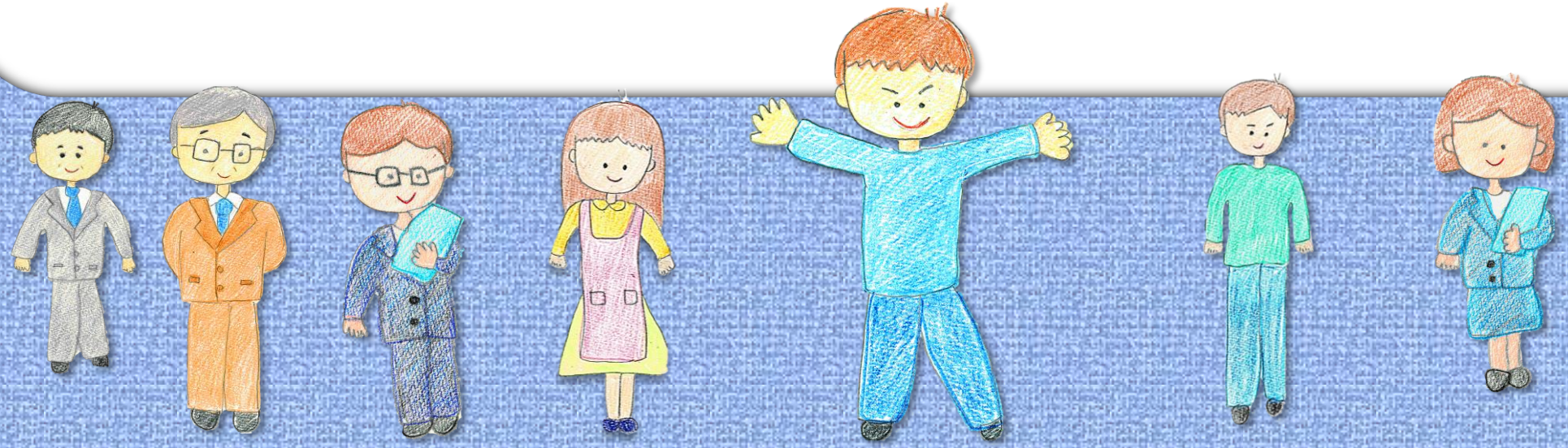
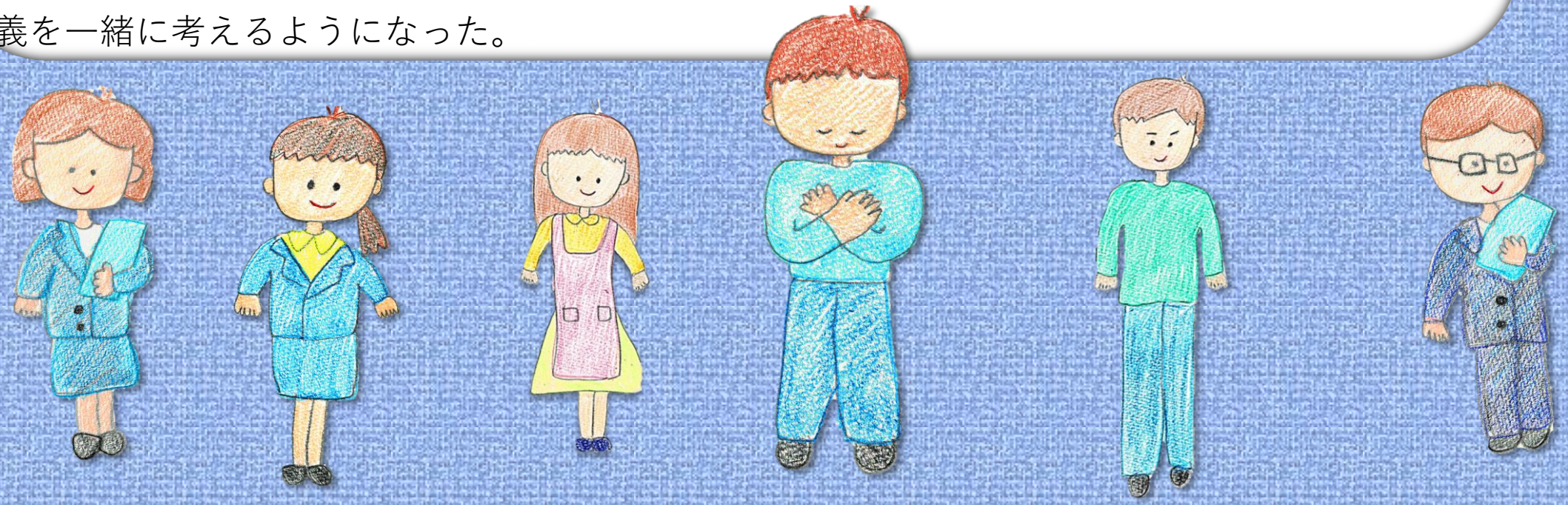
関わり

はじめは、本人の被害的な様子から医療受診の緊急性（病理：統合失調症の前駆症状等）を判断するために、ＳＳＷが精神保健福祉センターに連絡して、状況を伝えて助言をもらったところ、緊急性はないと判断された。ＳＣとの相談、ＳＳＷの訪問相談、それぞれの報告を受け、管理職にも報告をした上で、再び教員－SC－SSW―両親との支援会議を実施し、さらに「本人の理解」を深めて、それぞれ対応の在り方と役割を模索した。生きづらさの背景に、入学当初から学習環境の変化により、本人の中で混乱が生じて、友人とのつながりも実感できず、不全感をもっていたことが見えてきた。そこには、発達障害の可能性が垣間見えて、「本人にとって効率的な勉強方法を考えるために」という理由から、再びSSWより精神保健福祉センターに連絡して、医療機関を紹介してもらう。医療機関では心理検査を実施し、検査結果を本人と詳しく確認して、そのアセスメントを、教員－SC－SSW－両親－本人－医師－病院心理士との回復ネットワークで共有した



関わり

その後の、担任の役割として、「ゲームをする/しない」「登校する/しない」ではなく、進学のための要件（出欠・成績・単位等）を保護者に伝えた上で、専科の先生にかけあって授業での使用教材・プリントを提供、あと試験対策や単位が危うい科目の具体的な対策方法・フォローを提示した。また、学校での居場所を確保するために、相談室（別室）登校、登校時間の配慮、部活からの参加の可否、（発達障害の場合は）合理的配慮の検討等を「提案」することで、学校でできることを提供し、引き続き理解のネットワークの中で情報交換を行った。



保護者が担任とSC、そして本人が外部機関（医療）とつながり、本人の「生きづらさ」の理解が深まる。そこから、学校でできること、保護者としての関わり方を振り返り、回復環境が整えられた。関係者の中で、本人の理解が深まることで、本人も「わかってもらえる」感覚が増して、少しずつ「生きづらさ」が周囲に語れるようになった。さらにSSWの訪問にて、さらに家庭での対話が促される。SCは学校の相談室にて保護者と面談、学校との情報共有を継続して、本人の困り事を家族、学校で共有することができ（また、夫婦間の課題も「対話」で浮き彫りになり）、家族全体のあり方が変化し始めた。「ゲームをする/しない」ではなく、今後、本人がどうしていきたいか、について相談があり、学校に通うことの意味や意義を一緒に考えるようになった。